

良心学研究センター 設立記念シンポジウム

良心を世界に

良心を覚醒させる知の連携と知の実践

なぜ今「良心」を問う必要があるのでしょうか。多様な学問領域からアプローチしながら、良心学研究センターが目指す地平を展望します。

日時：7月3日（金）16:40-18:10

場所：同志社礼拝堂（同志社大学 今出川キャンパス）

司会：位田 隆一（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 特別客員教授、
生命倫理ガバナンス研究センター長）

基調講演：小原 克博（同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長）

パネルディスカッション

沖田 行司（同志社大学 社会学部 教授）

中村 信博（同志社女子大学 学芸学部情報メディア学科 教授）

林田 明（同志社大学 理工学部 教授）

Samir Abdel Hamid I. Nouh（同志社大学 神学部 客員教授）

八木 匡（同志社大学 経済学部 教授）

主催 同志社大学 良心学研究センター

<http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

■良心学研究センターについて

良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

■センター長挨拶（ウェブサイトより）

良心とは何でしょうか。英語の *conscience* はギリシア思想に由来する長い系譜を有しており（原義は「共に知る」）、日本では 19 世紀末に「良心」という訳語を与えられることになりました。時代や地域によって「良心」の理解や解釈の違いがあることは言うまでもありませんが、「良心」をめぐる、人間の心（意識）のあり方、人間の相互関係、超越者との関係に関心が向けられてきました。その意味では、良心は「道徳」や「倫理」、「利他主義」や「宗教」、「グローバル・エシックス」や「宗教間対話」などとも隣接する概念であり、本研究センターにおいても、これらをキーワードにしながら、幅広く人間の精神と行動を研究していきたいと考えています。

現代世界を見渡すと、人間の心は必ずしも寛容や平和を生み出しておらず、むしろ、様々な価値観の対立が紛争や戦争を引き起こしている様が見えてきます。もちろん、こうした状況は今に始まったことではありませんが、大規模な人口移動、グローバルな価値多元化、出口の見えないテロとの戦いなどは現代特有の現象であり、文字通り「良心が痛む」出来事も少なくはありません。こうした 21 世紀初頭の状況を視野に入れるとき、私は良心を「対立する価値観（判断）を調停する能力」として理解したいと思います。

そうした良心の力を覚醒し、問題解決に寄与するためには、様々な「知」の連携と「知」の実践が欠かせません。本センターが、人文社会系や理系といった既存の学問領域を超えて、学際的な研究を展開しようとする理由もそこにあります。一人の人間が良心を痛めたところで、事態を改善するためにできることなど何もないと考えるかもしれません。しかし、一人ひとりの良心をつなぎ合わせ、それぞれの場で実践することができれば、世界の「見え方」は変わってくると思います。

同志社の設立者・新島襄は米国留学中に *conscience* という言葉に出会い、それを実践する人々によって助けられ、将来への展望が開かれていきました。*conscience* を知り、体験することによって、彼の世界観は大きく変わったと言えるでしょう。良心学研究センターが目指す目標は無謀に見えるかもしれません。しかし、「個儻不羈（てきとうふき）なる書生を圧束せず、…」（常軌では律しがたい学生を圧迫しないで、…）という新島が遺した言葉に励まされながら、個儻不羈なるチャレンジを試みていきたいと考えています。

■良心学研究センター 研究員（運営協議会メンバー）

小原 克博（神学部 教授）：宗教と良心 【センター長】

Samir Abdel Hamid I. Nouh（神学部 客員教授）：イスラームと良心

沖田 行司（社会学部 教授）：新島襄の思想と道德教育

木原 活信（社会学部 教授）：社会福祉と良心

村田 晃嗣（法学部 教授）：国際政治と良心

和田 喜彦（経済学部 教授）：エコロジー経済と良心

川満 直樹（商学部 准教授）：国際ビジネスと良心

林田 明（理工学部 教授）：自然科学と良心

鈴木 直人（心理学部 教授）：心理学と良心

内藤 正典（グローバル・スタディーズ研究科 教授）：イスラームと良心

位田 隆一（グローバル・スタディーズ研究科 特別客員教授）：国際生命倫理と良心

■良心学研究センター 研究員

八木 匡（同志社大学 経済学部 教授）

横井 和彦（同志社大学 経済学部 教授）

瓜生原 葉子（同志社大学 商学部 准教授）

和田 元（同志社大学 理工学部 教授）

内山 伊知郎（同志社大学 心理学部 教授）

Gavin James Campbell（同志社大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科 教授）

藤山 文乃（同志社大学大学院 脳科学研究科 教授）

貫名 信行（同志社大学大学院 脳科学研究科 教授）

櫻井 芳雄（同志社大学大学院 脳科学研究科 教授）

Idiris Danismaz（同志社大学 高等研究教育機構 特定任用研究員）

中村 信博（同志社女子大学 学芸学部情報メディア学科 教授）

Stig Lindberg（京都大学文学研究科キリスト教学 助教）

Michel Mohr (Associate Professor, Department of Religion, University of Hawaii)

Salah Osman (Professor, Faculty of Arts, Minufiya University, Egypt)

会田 弘継（共同通信社 客員論説委員、青山学院大学 地球社会共生学部 教授）

石合 力（朝日新聞社 国際報道部部長）

伊奈 久喜（日本経済新聞社 特別編集委員、同志社大学 客員教授）

内田 孝（京都新聞社 編集局文化部 編集委員）

登壇者 略歴

位田 隆一（いだ・りゅういち）（司会）

同志社大学特別客員教授、京都大学名誉教授。専門：国際生命倫理法。

京都大学法学部卒業後、岡山大学を経て、京都大学教授、2012年から同志社大学へ。滋賀大学監事（非常勤）やけいはんな丘陵にある国際高等研究所副所長も務める。

元来の専攻は国際法・国際機構法で、特に南北問題を扱う「開発の国際法」を中心に、国際社会の変動に対する国際法規範の変容を研究。1996年より8年間ユネスコで国際生命倫理委員会委員（'98より委員長）として国際的生命倫理規範の形成に携り、生命倫理の道に。これまで、多くの国際的な場で生命倫理の議論に参画している。国内でも、クローン、ゲノムや再生医療等、様々な生命倫理問題の議論やルール作り、審査等に関与してきた。昨年からはWHOでエボラウィルス疾患問題の倫理専門家。昨年・今年と「良心学」講義で科学技術の良心を担当。2002年に生命倫理の功績によりフランス学術教育勲章騎士章。

小原 克博（こはら・かつひろ）（基調講演）

1965年、大阪生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士（神学）。現在、同志社大学神学部教授、良心学研究センター センター長。日本宗教学会 理事、日本基督教学会 理事、宗教倫理学会 評議員、京都民医連中央病院 倫理委員会 委員長も務める。一神教学際研究センター長（2010-2015年）、京都・宗教系大学院連合 議長（2013-2015年）等を歴任。

専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。先端医療、環境問題、性差別などをめぐる倫理的課題や、宗教と政治の関係、および、一神教に焦点を当てた文明論、戦争論に取り組む。

著書として『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』（晃洋書房、2010年）、『神のドラマトゥルギー——自然・宗教・歴史・身体を舞台として』（教文館、2002年）、『原発とキリスト教——私たちはこう考える』（共著、新教出版社、2011年）、『原理主義から世界の動きが見える——キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』（共著、PHP研究所、2006年）などがある。

（以下、パネリスト）

沖田 行司（おきた・ゆくじ）

1948年京都府生まれ。同志社大学 社会学部教授。専門：日本思想史・日本教育文化史。博士（文化史学）論博。

1979年3月、同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻博士後期課程満期退学。1979年4月、同志社大学文学部助手、専任講師、助教授を経て、1990年4月に文学部教授となり、

改組転換で2005年に社会学部教授。ハワイ大学日本研究所客員研究員（1989～1990）、中国人民大学客座教授（2003～2013）。

単著：『日本人をつくった教育』2000年、大巧社。『新訂版 日本近代教育の思想史研究』2007年、学術出版会。『藩校・私塾の思想と教育』2011年、日本武道館。編著：『教育社会史』（新体系日本史16）2002年、山川出版。『人物で見る日本の教育』2012年、ミネルヴァ書房。共著：『応用倫理学講義 6 教育』2005年、岩波書店。『近代東アジアの経済倫理とその実践』2009年、日本経済評論社。『横井小楠：公共する人間』2010年、東京大学出版。『正義とは』2012年、岩波書店。『知るとは』2012年、岩波書店。

中村 信博（なかむら・のぶひろ）

1955年、長野県生まれ。同志社大学神学部、同大学院神学研究科博士課程（前期）修了。日本基督教団霊南坂教会担任教師（伝道師、牧師）を経て同志社女子大学へ。専任講師、助教授、教授。この間、日本基督教団京都葵教会兼務担任教師（牧師）、兼務牧師代務者、ミュンヘン大学客員研究員、学校法人同志社評議員、理事などを歴任。現在、同志社女子大学宗教部長、学芸学部情報メディア学科教授、宗教倫理学会副会長、公益財団法人日本クリスチャン・アカデミー理事。著書に『新共同訳 旧約聖書注解（I）』（共著）、『新共同訳 旧約聖書略解』（共著）、『聖書 語りの風景』（共編著）など。

聖書のもつメディア性に注目し、文化史における聖書の影響と意味を探求。宗教における倫理問題にも関心を寄せている。

林田 明（はやしだ・あきら）

同志社大学理工学部環境システム学科教授。理工学部長・理工学研究科長。博士課程教育リーディング・プログラム「グローバル・リソース・マネジメント」アシスタント・プログラム・コーディネーター。京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。研究分野は地球システム科学、古地磁気学・岩石磁気学。岩石や地層に記録された過去の地球磁場の復元とそれを利用した年代推定および地殻変動・環境変動の解析。特に最近は、深海底や湖底、陸上の堆積物の磁気特性を指標として、東アジアや中米の気候変動の復元と人間活動の影響の検出を目指す研究を進めている。最近の邦文著作として「古地磁気永年変化と環境磁気学の指標による堆積物の高精度編年」（月刊地球号外，63号，2014）、「宮古島の津波石」（GRM Newsletter, Vol. 1, 2014）がある。

Samir Abdel Hamid I. Nouh

Present Research: Common Cultural and Shared Values in Religions and Beliefs, Islam, Buddhism and Shinto.

Posts: Doshisha University (Oct.1st. 2004- March 31st. 2016), Imam Muhammad Bin

Saud Islamic University in Tokyo (1982-1986) Riyadh (Sept.1982-Aug.2004), Cairo University (Oct.1967- Sept. 1982)

Main Books (in Arabic): *Islam and Religions in Japan*, King Abdel Aziz Public Library Riyadh, 2001. *Tanaka Ippei: pioneer of Islamic Studies in Japan and his travels to Arabia and other Asian Countries* (translation and studies . cooperated with Sara Takahashi) published by Center of King Faisal for Research and Islamic Studies, Riyadh, 2006. *Cultural Bridges between Islamic World and Japan*, Kuwait Minster of Awqaf and Religious Affairs, 2009. *Understanding Islam in Japan: Past and Present*, King Abdulaziz Public Library, Riyadh, 2010. *Travelogue to Palestine and Egypt*, Vol 1 (1905), Vol 2 (1919) by Tokutomi Kenjiro (Translation and study, cooperated with Sara Takahashi) National Council of Translation, Ministry of Culture Egypt, Cairo, 2014.

八木 匡 (やぎ・ただし)

同志社大学経済学部教授。専門：公共経済学、スポーツ経済学、文化経済学、教育経済学。

1959年愛知県生まれ、経済学博士。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程単位満了退学。京都大学経済研究所助手、名古屋大学経済学部助教授を経た後、現在同志社大学経済学部教授、日本経済学会理事(2002年～2007年)、文化経済学会<日本>理事(2010年～)。

主著：European Economic Review 等海外学術雑誌等に論文を多数掲載。『教育と格差』（橘木俊詔との共著）、『スポーツの経済と政策』（横山勝彦、伊多波良雄、伊吹勇亮との共編著）、『スポーツの組織文化と産業』等の著書を執筆。

【基調講演】良心を世界に——良心を覚醒させる知の連携と知の実践

小原克博（同志社大学 神学部教授、良心学研究センター長）

1. 良心学研究センターの設立の経緯と目的

- 1) 教育と研究の連携：同志社科目「建学の精神とキリスト教」、複合領域科目「良心学」
- 2) 良心を世界に：歴史的起源と現代との往復運動、そして未来を展望する

新島襄・同志社の思想家たち、西洋思想、イスラーム、人文社会系の諸学問、自然科学

2. 「良心」とは何か

- 1) 西洋における「良心」の系譜

conscience ← conscientia（コンスキエンティア、ラテン語） = con（共に） + scire（知る）

συνείδησις（シュネイデーシス、ギリシア語）

= συν（共に） + εἶδω（知る、見る、認識する、考える）

- 2) 誰と「共に知る」のか？

①自己の内面的な対話（内なる他者との対話） <自律的良心>

ストア派（キケロ、セネカ）——理性と自由に良心の根源を求める。この考えは近世以降、再度強くなっていく（デカルト、カント、ニーチェら）。

【問い】この良心を現代人は手にしているのか？

【問い】内的な良心に基づけば、すべての行為が許されるのか？

②他者と「共に知る」 <他律的良心・社会的良心>

③神と「共に知る」 <神律的良心>

中世カトリック教会（教会の権威）、プロテスタント教会（良心の自由、信教の自由）

- 3) 日本における「良心」

conscience の訳語として「良心」が最初に用いられたのはブリッジマン・カルバートソン訳『新約聖書』（1863年）において、『孟子』から取られた。孟子は性善説を唱えた。日本語の「良心」も、こうした儒教思想の影響を受けている。しかし、「良心」の思想的広がりを見視野に入れるためには、「良」を一度取り除き、「共に知る」に起因する緊張関係を取り戻すべきではないか。

アルベルト・シュヴァイツァー「断じて鈍感にされてはならない。われわれが〔倫理的〕葛藤をいよいよ深く体験するならば、われわれは真理のなかにある。疚やましくない良心などは、悪魔の発明である。」（『文化と倫理』（著作集第七巻）322頁）

【問い】瞬時に答えを得られるIT時代の「良心」とは？

3. 個愼不羈なるチャレンジ——良心を覚醒させる知の連携と知の実践

新島襄と良心

沖田行司（同志社大学 社会学部教授）

I. 日本における良心論

1. 知育・徳育論争 1879 (M12)

天皇側近派：「教学大旨」＝国教の樹立→元田永孚

開明官僚派：「教育議」＝主知主義→伊藤博文

2. 同志社における知徳論争 1878 (M11)

・智は徳に勝る→徳富蘇峰、大久保真次郎：「同心交社」→「クラス合併問題」

・徳優位論→神学専攻学生（新島の教育方針）

・1880 (M13) 4月13日→「新島自責の杖事件」

3. キリスト者の良心論

・植村正久：「神の現れとしての人間の良心」（『真理一斑』1883M16）

・大西祝：「宗教心なくば遂に道徳を如何。天下また宗教の外に徳義の基礎を置くべき者あらんや。茲に一の良心といふ者あり。然れ共是れまた神の念（則善悪の純念）を去る時は甚だ正確ならざるものとなる可し」（『哲学会雑誌』23号1888年M21）後に『良心起原論』1890 (M23)

・原田助「良心の本源」（『六合雑誌』）1888 (M21)

II. 新島襄の良心言説

1. 知性だけあって道徳上の主義がなければ、その個人は隣人や社会に対して益をなすよりは一層害をなすであろう。とぎすまされた知性はよく切れるナイフに似ている。かれは仲間をそこない、自分自身をもほろぼすことになるかもしれない。

（「ハーディー夫妻宛書簡」1872年3月19日M5）

2. 「智識・財産・自由・良心の働きを養生する事」（「文明を組成するの四大元素」15年7月）、 「良心の働きを養生すること」（良心の働きを鋭くする事、真理に順ひ真理に反かぬ事 ○神の愛する所を愛し、神の悪むところを悪む

III. 同志社大学設立の旨意（1888年M21）

1. 斯くの如くにして同志社は設立したり、然れども其目的とするところは、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尚ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り下芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき、而して斯くの如き教育は、決して一方に偏したる知育にて達し得可き者に非ず、又人心を支配するの能力を失ふたる儒教主義の能くす可き所に非ず、唯上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり。

2. 一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実是一国を組織する教育あり、知識あり、品行ある人民の力に抛らざる可らず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す。

むすび

日本の近代教育論争の一つに知育・徳育論争がある。知育優先論にたち、産業立国を急ぐ開明官僚派と徳育優先論を主張する復古的な天皇側近派との対立にたいして、キリスト者の第三の徳育・知育論が登場する。「良心」を教育の根底にすえて知育・徳育相関論を説いた新島襄の「良心教育論」は今日においても有効な教育思想と考えられる。

聖書と良心ー同志社女子大学におけるキリスト教教育がめざすものー

中村信博（同志社女子大学 学芸学部情報メディア学科 教授）

【前提】

■コンションス

かつ伝道の余暇あらば、少しの翻訳等成され候ては如何。今日些少の障碍または少しくコンションス〔conscience 良心〕を傷むる等の事のために、国家の大鴻益となるべき伝道に損失を与えしむるの時にあらず。（1880（明治13）年2月25日 小崎弘道（靈南坂教会牧師）宛書簡）

→ conscience = con + science (scientia) → 共通知（共通感覚）

■良心碑 建立は1940年11月29日（同志社創立65周年・新島永眠50周年記念事業）

「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ（望テ止マサルナリ）」

1889（明治22）年11月23日 横田安止宛書簡

■会衆主義という考え方

（Congregational Church・日本組合教会）の伝統

→大切にされる精神：「愛以之貫」、「真理ノ囚人コソ真ニ自由ノ人ナレ」、「個儻不羈」

【共通知（感覚）の形成】

■教育目標：キリスト教という「宗教」の枠を越えた「共通感覚」への感受性を育てる

■共通科目「聖書」（全学共通必修科目@キリスト教・同志社関係科目）

■チャペル・アワー（学内礼拝・授業日は毎日1講時と2講時の間）

礼拝出席者（両キャンパス）1日平均 2015年4月 296人、5月 171人

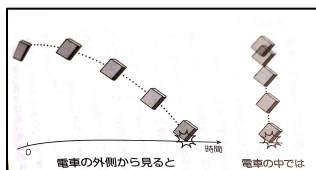
学修共同体（Doshisha Women's College of Liberal Arts）の象徴的プログラム

【聖書をどう読むのか？】

■聖書の読みづらさ

聖書の中で語られる物語と現実とのギャップをどのようにとらえればよいのかわからなかった。たとえば、人は塵からつくられたという聖書の記述（創二7）と、科学的に見た人類誕生の過程は異なる。キリスト教を信じる人は、そのような科学的知識を否定し、聖書の言葉をすべて信じるべきなのか。

（読者の声・大貫隆『聖書の読み方』岩波新書、2010年、20ページ）



電車の中の落下物



星座 (constellation)

- ・通読に向かない
- ・主語は神（神は勝手だ！）
- ・キリスト教教会の伝統的で規範的な読み方が一般の読者を拘束していないか

■共感による「世界理解」

しかし、その共感とは、聖書の一つ一つの文章や記述をそのまま真理として受けとることではない。まして、特定の教派的な読み方に賛成することでもない。そうではなくて、読者が聖書を読んで自分自身と世界を新しく発見し直す出来事（P・リクール、下線は中村）ことである。（大貫隆『前掲書』10ページ）

■重層する人称的世界

交換可能性／交換不可能性、共同可能性／共同不可能性

← 主なる神はアダムを呼ばれた。「(あなたは) どこにいるのか。」（創世記2章9節）

【聖書 自己を越境（超越）する世界への招き】

■超越的世界観の形成

他者の考えや認識、感覚と照応しながら、自己を相対化し、周囲の人びととともに生きる

自然科学と良心

林田 明（同志社大学理工学部 教授）

2014 年度の文部科学省による「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」の改訂と「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」の策定を受け、同志社大学でもこれらに対応する規定の制定や改正が行われた。合わせて教員と研究員、学生を対象とするコンプライアンス教育と研究倫理教育の講習が実施され、受講後には「研究不正防止に関する確認書」に署名が求められることになった。このような状況は、頻発する研究費の不正経理や研究活動における不正行為、たとえば STAP 細胞事件や高血圧症治療薬の臨床研究事案の発生を背景として生じたものであり、研究活動が個人の知的営みというよりも、社会からの信頼と負託の上に成立する事業と認識されるようになってきていることを示している。

“Science”の語源はラテン語の“scientia”（知識）であるが、17～18 世紀に自然の法則とそれを追求する行為のことを意味するようになった。それまで“natural philosopher”と呼ばれていた物質世界の探求者に対して“scientist”という呼称が初めて使われたのは 1840 年ごろと言われているが、このとき既に、科学に支えられた技術、すなわち科学技術が欧米を中心に広く利用されるようになっていた。20 世紀の 2 度の世界大戦を通じて科学と技術はさらに分かちがたいものとなり、軍事利用や産業の発展を支える国策としての重要性が高まった。科学技術の発展は人間に恩恵をもたらす一方、社会や生活、自然環境をも変容させ、公害と地球環境問題、原子力発電所の事故、薬害や医療事故など多くの負の側面が顕わになっている。研究費の不正使用と捏造・改竄・盗用などの不正行為も科学技術の負の側面として位置づけられる。

近代科学の形成に貢献した研究者とその行為を分析した Robert K. Merton (1949) は、科学者の行動規範として Communalism（公有主義）、Universality（普遍主義）、Disinterestedness（無私性）、Organized Skepticism（組織的懐疑主義）が存在すると述べた。これを基に、Communalism, Universality, Disinterestedness, Originality, Skepticism の頭文字を組み合わせた“CUDOS”が、賞賛されるべき科学者の姿であるとされてきた。それに対し John M. Ziman (1994) は、産業と強く結びついた科学の特質として Propriety（所有性）、Local（局所性）、Authoritarian（権威主義）、Commissioned work（請負性）、Expert work（専門性）を挙げ、これらを実践する専門的問題解決者が“PLACE”を得ることができる と述べた。Ziman が示したのは主として産業界で活動する科学者の姿であったが、大学や公的研究機関の研究者にも当てはまる。このように科学者の倫理観は時代とともに変化しており、科学技術の負の側面が顕著になった現代の研究者は、あらためて自らの良心について考える責務を負っている。自然科学や工学を学ぶ学生の良心教育も重要な課題である。

科学と社会の良好な関係を築くために検討すべきことは多岐にわたるが、特に非専門家や一般市民との健全なコミュニケーションの役割を重視すべきである。たとえば核兵器や原子力発電、生殖医療の問題を考えれば、一般市民が自然科学の成果を理解し、実用化のリスクを十分に認識することの重要性が浮かび上がる。もちろん、科学者たちがいわゆる普及活動を行うだけでなく、一般市民にも自然科学の課題や現状を理解する努力が求められる。また、社会の要請に応じてすぐに役立つ実用的な知識や技術ばかりを追求するのではなく、未知の世界を探る自然科学本来の営みについて科学者と市民が興味と関心を共有する必要がある。そのために、大学においてリベラルアーツ教育が果たす役割も重要である。

Concept of Conscience, Riyoshin 良心 ,Al- Dhamir الضمير in Islam

Samir Nouh, Visiting Professor, School of Theology, Doshisha University

- 1- Arab scholars and the study of conscience
Arab scholars think Conscience is something cannot be studied, so they want to get more information about the newly established center at Doshisha University.
- 2- Conscience, Riyoshin 良心 , (Basic meaning in ” Arabic, Persian and Urdu”:Riyoshin in the three languages means Al-Dhamir الضمير it means also Al-Wijdan الوجدان
- 3- Al-Dhamir ضمير in Arabic literature before and after Islam:
A)Al Muhalhil (died 531 b) Jarir Al-tamimi (died 728) c) Abu Nuwas (Died 814) d) Al Maari (Died 1057) e) In Modern poetry
- 4- Quranic concept of al- Dhamir الضمير
The word Dhamir ضمير is not mentioned in Quran, but we can notice few words which stand for the same meaning a) Soul, Annafs النفس b) Heart, al-fuad الفؤاد c) Inner feeling or emotion, Al-Wijdan الوجدان
- 5- Concept of Al-Dhamir الضمير in Al- Hadith الحديث Hadith is the report of Prophet Muhammad , the word Dhamir ضمير is not mentioned in Hadith, but once prophet Muhammad explain about Al-Dhamir الضمير in another word, Japanese translation in 40 のハディース by イマーム・アンナワウイー 編
- 6- Concept of Al-Dhamir الضمير in Modern Arabic literature and daily life.
- 7- Conclusion

コミュニティの基盤としての共感とモラル

八木 匡（同志社大学経済学部 教授）

1. コミュニティの質

人間の「間」の意味とは？

人と人との関係性 : 関係性の質を表している

エミュレーション能力と共感能力によって質を高める

集団と集団の関係性

コミュニティの質を決定

マチゲンガの循環社会

コミュニティの根源 : 食料安全保障と、それを可能にする平等分配

2. 経済活動における信頼

共感は人間の生来的能力

アダム・スミス『道徳感情論』は、『諸国民の富』に発刊されている。

道徳感情論は「同感」理論であり、経済活動の暴走を抑える役割を果たしている。

ポールザック：オキシトシンの分析 : 共感・信頼・協調

3. パレート最適性の構造

人間に本来備わっている共感の本能が果たす役割を考慮していない

労働者の協調誘因と雇用環境・賃金制度

公共財の私的供給、地域コミュニティへの参加行動、NPO 活動

4. Kotler, et. al. (2010) Marketing 3.0

Kotler は、文化と精神性を基礎とした創造性が市場における価値の源泉であると主張

このような価値を生む創造的活動が企業と消費者との協働によってもたらされると述べている。

文化と精神性がなぜ、人々のモノやサービスに対する支払い意思額を高めるのか

5. 伝統的コミュニティ参加理論への批判

これまでコミュニティ活動への参加意思決定を分析する際には、コミュニティ活動に参加することによって期待できる便益を計算し、時間機会費用を考慮して最適化する方法が用いられてきた。

自治会の清掃活動への参加において、不参加者に対して罰金が課すことは、参加は義務では無く、金銭での参加が労働提供による参加かという選択が認められているという解釈を付与する可能性がある。このような解釈の下では、罰金の賦課は、不参加に伴う負の情動を減少させ、逆に不参加の意思決定の確率を高める可能性が存在する。